

茶臼岳の南東の麓には、大地がむき出しになった一角があり、そこには石が散らばっている。その中に暗い色をした石が一つあり、しめ縄と紙垂を纏っている。しめ縄と紙垂は、神道で神聖な空間を示す麻の縄と垂れ下がった紙片を指す。この石が殺生石であり、地域の伝承が残る不吉な場所である。

日本の民話では、狐は人間の姿になることのできる神秘的な動物である。最も古く、最も賢く、最も強い狐は 9 本の尾を持っている。昔、美しい女性の姿に化身した金毛九尾の妖狐がいた。狐は玉藻の前という名の優雅な宮廷婦人を装い、鳥羽上皇（1103～1156）の宮廷に仕えた。狐はすぐに上皇の寵愛を得たが、上皇が病気になったとき、陰陽師にその正体を明らかにされてしまったため、那須に逃げ込んだ。長い戦いの後、上皇の討伐軍は狐を殺した。狐の体は巨石に姿を変えたが、キツネの怨念は生き続けた。巨石から邪気と有害なガスが染み出続け、石の近くに残っていたものがすべて死んでしまったことから、この石は殺生石と名付けられた。

数世紀後、僧侶の源翁（1329～1400）が那須にやって来た。魂の力を壊そうと、石に大きな金槌を振りおろし、3 つに打ち砕いた。石片の 1 つは福島県に、もう 1 つは広島に飛んで、最後の 1 つはその場に残った。それ以来、狐の魂を鎮めるために、毎年 5 月の最終日曜日に御神火祭と呼ばれる夜の儀式が行われている。たいまつを持った参加者たちが那須温泉神社から殺生石へと向かう。そこでは、金色のかつらと狐の仮面を身に着けた白装束の太鼓奏者が、巨大な焚き火の前で特別な太鼓（九尾太鼓と呼ばれる）を叩く。

殺生石の言い伝えの一部は科学的に説明することができる。石は、二酸化硫黄と硫化水素ガスを放出する茶臼岳の火山噴火口の脇にある。噴き出す蒸気によって地面が暖められるため、特に冬になると岩の周りに小動物が集まってくる。そして有毒な煙が眠っている動物たちを殺してしまうのである。1689 年に訪れた有名な俳人の松尾芭蕉（1644～1694）は、「奥の細道」の中で、死んだ蝶や蜂が石の周りの地面に重なり、あまりにも厚かったので、下の砂が見えないほどだったと述べている。

1957 年、殺生石は栃木県の指定文化財になった。九尾の狐の物語は、能楽、歌舞伎、人形浄瑠璃で上演されている。